



全国伝統建具保存会 松代城真田邸で研修

全国伝統建具技術保存会（横浜一会長）は7月2日、長野県長野市の国指定史跡真田邸（松代城附新御殿跡）の見学研修会を実施。補修工事を通じ、実践的な文化財保護活動の内容を学んだ。

研修会に先立ち、横田会長は「長野で4回目の開催となるが、会長である私の身近でお世話できる環



境が良いと考え、真田御殿の改修工事の研修を企画した。真田御殿は取り壊し時と建具修復工事を見学してきたが、今回完成の様子を見学する。建具がどの様に修理され、どの様に納められているのかを学んでいただきたい」と挨拶。長野市教育委員会文化財課の渋沢文主査の案内で真田邸の外観から

内部までを見学した。

真田邸は江戸時代後期の幕府による参勤交代制度改革に伴い、元治元年（1864年）に建設された。造営から150年が経過した現在、主屋をはじめとした建築物は地震による傾斜や雨漏りによる木部の腐朽、庭園においては土砂流出や樹木の荒廃が進み、長野市では平成16年から大規模な改修工事を実施。表門や屋内の建具は栄建具工芸が修復を担当した。主要部分の工事がこの程完成し、9月18日より一般公開を予定している。

全国伝統建具技術保存会の参加者は最初に修理された表門を見学。過去の修復事例を基に「面材は杉を使用。極力建築当時の原型を忠実に再現するため、可能な限り現存する材を活かし、材が目減りしている部分は金具で厚さを調整した。修復部分の材は表面の色柄を合わせるために柿渋塗装とし、長期荷重によって傾いていた門柱及び軸金物は新調。しかしながら、鉾や乳金物、八双金物是一部を除いて現存品を再利用している。